

＜学会記事＞5. チンキャップ治療と下顎結合部唇側面の骨吸収との関連について(第2回東北大学歯学会大会講演抄録)(一般講演)：金属ピン描記法による検索

著者	高橋 弘, 長谷川 正文, 遠藤 隆一, 宇賀 晃, 坂本 敏彦
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	1
号	2
ページ	132-133
発行年	1982-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/31087

3. 身元不明死体と歯科治療

山田文夫, 押田茂實 (医学部法医)

身元不明死体, ことに白骨死体の場合, 性別・年齢・特徴などの鑑定は重要なものであり, 硬組織である歯の所見は非常に有用である。東北地方では年間約40~60体の身元不明死体が発見され, その約半数で身元が確認されており, 全国では年間約1,000人強の身元不明死体があり, 約40~50%の身元が確認されている。宮城県内の昭和49年~56年の身元不明死体は130体あり, 22体の身元が未だ不明となっている。

事例1. 昭和56年7月, 県南の某町の山林の中から白骨死体が発見され, 司法解剖が行われた。鑑定の結果, 骨は女性40歳位と推定され死因は不明であったが, 歯は3本あり, 1本の歯にサンブラ冠が装着され, 上下顎に局部床義歯が挿入されていた。この義歯を手配したところ, 某医院の技工室で制作したものであることがわかり, カルテと照合の結果行方不明となっていた主婦 (当時38歳) であることが判明した。

事例2. 昭和50年4月水産加工工場の煙突の中から骨が発見された。骨はほとんど炭化し, 骨片・筋肉片・判別不能な組織片が合計約1,500個あった。修復すると, 重複するものではなく, 形態は成人に相当した。4本の歯にアマルガム充填があり, 歯の摩耗の程度は中等度で下顎歯槽骨の吸収も軽度みられた。間もなく行方不明になっている45歳の男の歯科治療カルテが浮びあがり, 白骨所見と一致したので身元が確認され, ノイローゼ気味で煙突から飛び降り自殺したものと判断された。

歯科治療の際レントゲン撮影が行われており, 個人識別に役立っている。新幹線・航空機・大型フェリー等の大事故の際には, 個人識別がクローズアップされ, 治療した歯科医のカルテが有用な参考資料として活用されてくるものと思われる。

4. 合着用セメントの諸性質と保持力

遠藤達雄 (歯科保存2)

試験用金型を用いて各種合着用セメントの合着力と接着強さを測定し, さらに圧縮強さ, 引張り強さ, 硬化時寸法変化を測定比較して以下の結果を得た。

1. 3種の歯科用金属から成る金型を用いた場合の合着力は, EBAセメント>グラスアイオノマセメント>カルボキシレートセメント≒リン酸亜鉛セメントの順であった。

2. 接着強さは, カルボキシレートセメント≒グラ

スアイオノマーセメント>EBAセメント>リン酸亜鉛セメントの順であった。

3. 圧縮強さは, リン酸亜鉛セメント≒グラスアイオノマーセメント>カルボキシレートセメント>EBAセメントの順であった。

4. 引張り強さは, カルボキシレートセメント>リン酸亜鉛セメント>EBAセメント>グラスアイオノマーセメントの順であった。

5. 硬化時の寸法変化については, EBAセメントのみ膨張し, 他はグラスアイオノマー (空气中保存), カルボキシレートセメント, リン酸亜鉛セメント, グラスアイオノマー (水中保存) の順で収縮が大きかった。

6. セメントの圧縮強さと引張り強さのうち, 合着力に影響を与える因子は引張り強さであった。

7. 3種の歯科用金属を用いて得られるセメントの合着力は, Rを合着力とし, TSを引張り強さ, xを硬化時寸法変化, yを接着強さ, a, b, cを定数とすると, $R=TS(a+bx+cy)$ の式で近似的に求めることができた。

8. セメントの合着力を大きくするには, ①引張り強さを大きくする。②硬化時の収縮を小さくする。③接着強さを大きくする, などが有効であるものと考えられる。

9. セメントの合着力と規格試験の結果とはほとんど関係ないものと思われた。

5. チンキャップ治療と下顎結合部唇側面の骨吸収との関連について——金属ピン描記法による検索

高橋 弘, 長谷川正文, 遠藤隆一, 宇賀 晃
坂本敏彦 (歯科矯正)

金属ピン埋入を施した骨格性反対咬合のチンキャップ治療例10症例と, Angle I級およびII級計5症例の経年的頭部X線規格写真を資料として, チンキャップによる下顎結合部唇側面の吸収の有無について, 下顎中切歯根尖部下方に埋入した金属ピンの変位の有無を指標として検索を行った。その結果, つぎの結果が得られた。

1. チンキャップを使用した10症例中, 7症例に金属ピンの変位が認められた。しかも, この変位はいづれの症例においてもチンキャップの治療期間に生じていた。なお, 残り3症例には金属ピンの変位は認められなかった。

2. 治療前の下顎骨の形態分析の結果, 変位群は安定群に比較し steep mandible の状態を示し, かつ,

mental angle が小さく、下顎前歯の舌側傾斜が大きく、骨格性反対咬合の特徴的形態が強調されていた。

3. 変位群では、下顎結合部の厚径の減少と mental angle の減少が生じていた。

4. チンキャップ治療を行なわなかった Angle I 級および II 級の症例では、金属ピンの変位はみられなかった。

以上の結果から、つぎの結論を得た。

steep mandible で mental angle が小さな骨格性反対咬合の症例においては、チンキャップ治療によって、下顎結合部の唇側骨表面に骨吸収が生じる可能性が高い。

6. 顎関節機能障害に関する診断学的研究(第1報) 高橋和裕、三条大助(口腔診断・放射線)

顎口腔系の病変には炎症・腫瘍・感染症など多種多様なものがあり、その病態も様々であるが、一般にみられる顎機能障害患者では、臨床的に炎症症状がなく、顎関節部や顔面、頭部などの疼痛、顎関節部の雑音、開口障害のような顎関節の機能失調を主要な症状としているものが多い。そこで顎機能障害患者の診断基準になるデータを得るために、我々は昭和54年から昭和57年まで、東北大学歯学部附属病院口腔診断科外来を受診した患者で、問診及び各種の診査により、顎関節症と診断された100例について、種々の検討を行なった。

顎関節機能障害患者は、10~20才代が53%、30才以上が47%で、左右差はみられなかった。初発症状としては、疼痛が52%、雑音33%、こわばり、その他が15%であった。誘因が顎の開閉に関係していると思われるものは85%で、顎関節機能障害の初発した症例は73%、再発した症例は27%であった。運動痛は、91%で患側に80%認められ、雑音群では開口など、1種類の運動で運動痛がみられたものが60%であった。筋の圧痛は84%で、29%は両側に、外側翼突筋など1種類の筋の圧痛は56%にみられた。また、偏咀嚼は76%、顎の偏位は64%で、雑音は69%に認められ、雑音を主訴とした症例は初発より1カ月以上経過して来院する傾向がみられ、偏咀嚼との関係は少なく、過度の開口が雑音発生に起因しているものと思われた。

7. 最近7年間に第一口腔外科へ紹介された歯科治療時の偶発症について

山田和祐、作田嘉那子、角田 哲、梅津康生
遠藤義隆、阿部洋子、守谷友一、沼田政志
川村 仁、丸茂一郎、藤田 靖、林 進武

(口腔外科1)

猪狩俊郎、飯塚芳夫、斉藤利夫、越後成志

(口腔外科2)

このたび私達は、昭和50年11月1日から昭和57年10月31日までの最近7年間に、本学第一口腔外科に紹介され来院した、歯科治療時の偶発症患者について、臨床的検討を行った。なお、今回は抜歯後出血については検討しなかった。この7年間に第一口腔外科外来を受診した新患者数は14,729名で、このうち歯科治療時の偶発症で当科を紹介され来院した患者は35名で、全体の約0.24%を占めていた。これを年齢別にわけると、10歳代、20歳代が多く21例であり、全体の約6割を占め、ついで、30歳代5例、50歳代4例、40歳代3例、60歳以上と10歳以下に各々1例みられた。また性別に関しては、男性14例、女性21例と男性対女性の比は約2:3の割合であった。

偶発症発生から当科来院までの期間は、翌日来院が9例と最も多く、ついで当日、3日以内が各々4例、5日、7日以内が各々3例、10日以内2例の順であり、10日以上放置したものが6例で、最長のものは来院まで数年を経過していた。また4例は不明であった。

偶発症の内容は、上顎洞内歯根迷入が最も多く14例で、ついで上顎洞穿孔が4例、抜歯中断、下顎智歯口底部迷入、異物誤飲が各々3例、根管内リーマー破折が2例、上顎洞内異物、前胸部皮下気腫、エレベーター破折片骨内迷入、顔面皮下出血、嚢胞内歯根迷入、翼突下顎隙膿瘍が各々1例みられた。

8. 脱灰骨移植による骨形成について

斎藤利夫、安藤良晴、高木幸人、大山 治
松田耕策、手島貞一(口腔外科2)

近年 Urist らにより塩酸脱灰骨の骨形成促進能が注目され、その基礎的および臨床的研究が進められている。今回われわれは同種脱灰骨をラット背筋内へ筋肉内移植したものと、ラット頭頂骨膜下移植したものについて移植の場の違いによる脱灰骨の運命の相違について比較検討したので報告する。

使用した動物は、雄のウィスター系ラット(体重約250g、約10週齢)であった。脱灰骨の作製法は、同種